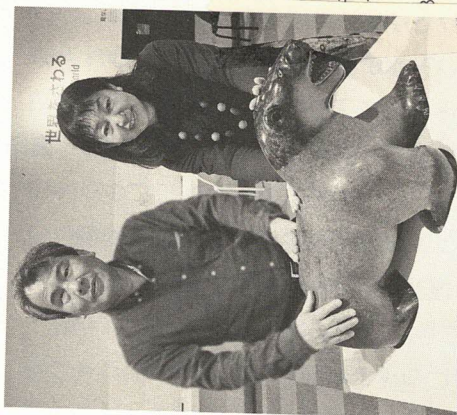


19歳で耳が聞こえなくなり、それがきっかけで悔しい思いや悲しい経験をしましたが、それ以上に聞こえなくなつたからこそできた、楽しく、面白い経験がたくさんあります。これらの経験について、いつか本を書いて、「聞こえない世界」が悲しいものではないことを伝えたい思いがずっと胸の内にありました。今回、タスキ・障害者リーダー育成海外研修派遣事業の同期でもあり、民博の大先輩でもある広瀬浩二郎さんに引こ張つていただきながら、共著で出版することが叶つたことを心から嬉しく思います。

視覚情報を大切にして生活している私と、音情報を大切にして生活している広瀬さんは、まるで正反対の世界に住んでいます。6章の対談でもお話ししましたが、私が、「これは見えるから便利、助かる」と思つたことは、広瀬さんには全く便利ではありませんし、広瀬さんが、「音があるから便利、ほっとする」と思つたものは、私には音だけでは困ることが多いです。このように、「よく見る人」と「よく聴く人」の日常は大きく異なる一方で、本書の執筆を通して、共通していることの発見や、共感を覚えることが多くあり、これまで以上に身近な存在として感じられるようになりました。例えば、2章で広瀬さんが盲学校の存在や点字を大切にされている思いが、私が、ろう学校や手話を大切にしてる思いとつながりました。また、3章で、広瀬さんが点字サークルの活動を通して障害の有無に関係なく語り合える友人を得られた喜びは、私が学生時代の手話サークルや地域活動を通して、手話を通して何でも語り合える友人を得た喜びと共通します。さらに、4章で広瀬さんが書かれた琵琶法師など目が見えない先人の歴史を大切にされた研究は、私が、手話の歴史を大切にしようと、手話がどのように成り立ち、変化しているのかという歴史言語学の観点から研究をしていることも関連します。それぞれ行っている研究分野は違いますが、途中で見えなくなり、聞こえなくなつたことをうまく活かして、目が見えない、耳が聞こえない世界をそれぞれに楽しんで生きています。日本社会ではまだ不利益を及ぼることも多い中、「マイノリティ社会の中で生きる者としての共感」とも言えるのかもかもしれません。

人生100年時代と言われる今日、これからも道は続きます。広瀬さんと私、退職後はどんな生活をしているのか、何を思つて、何に向かつて生活しているのか、またその時期になったら、一緒にできる面白い企画があるという話も楽しみに思っています。もちろん、もっと少し早くても良いですけど。笑



対談を終えて